

『若者自立塾』から見たニートの立ち直り学習

坂口 順治

(日本社会事業大学)

〔要 旨〕

政府は平成15年「若者自立・挑戦プラン」を発表した。その一環として共同体の合宿生活体験を通して就業へ結びつける「若者自立塾」がスタートした。この小論は 開始後約10カ月間の研修過程と結果について個人的考察を加えた実践報告である。合宿生活研修の結果、体験を通して態度変容や価値の転換を図って立ち直り、就業に結びついた若者が増加した。その主な要因は自然、指導者、仲間、共働協力者との直接的交流の感覚的体験であった。共同生活の出会いの体験は、他人からの指摘や自己表現の体験を通して、存在感の覚醒、人間力の創出につながる価値変革の体験学習であり、若者支援の有効な学習方法であると結論づけられる。

1、はじめに

若者にとって現代社会は悲劇的である。高い失業率、多い離職率、地域間格差の増大、増加する無業者という不況のしわ寄せが若者に集中している。若者は就労のチャンスに恵まれていないし社会からは軽視されて、フリーター、ニートなどが出現した。また、たとえ雇用があるとしても、正規雇用よりも派遣や短期的アルバイトやパートなどと、使い捨て労働力として若者たちを扱っている。現状では、若者が能力を蓄えて将来の可能性を育む機会が少ない上に、社会からは十分な支援の手は差し伸べられていない。

このような若者軽視の状態が続いていけば、今の若者は近い将来には、我が国の将来を支えていく中心的な力にもならないで、むしろ社会の保護対象者になっていくと予想される。働いて社会を支えていく原動力とはならず、生活保護受給の救済対象者になってしまう。それは言うまでもなく社会のコストが二重にかかり、国の力に大きな影響を与えることは必至であり社会の深刻な問題である。最近になってようやく政府は、人材こそが国の力であることを再認識して、根本的な対策を立て実行する段階に至ったのである。

政府の「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2004」に基づいて、内閣の若者自立・挑戦戦略会議（内閣官房、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、経済財政政策担当者の合同会議）は、若者の自立・挑戦のためのアクション・プラン（2004）を発表した。それは、若者の教育・雇用・産業政策の実効性・効率性を高めるために、省庁間の連携強化と、具体的な行動指針を提案して、実行に踏み切ることであった。

このアクション・プランの主な実践内容は、若年者の雇用・就業の実態調査、キャリア教育の充実（キャリア・スタート・ウィーク）、デュアルシステム（企業実習と教育の総合）推進、草の根eラーニングの支援、総合学習の活用、インターンシップの拡充、就業機会の拡大、ジョブ・カフェ、ヤング・キャリア・コンサルティングの普及、若者自立塾の開設などの総合的諸政策である。

実践計画の中でも「若者自立塾」は、ニートを対象にした3カ月の合宿共同生活を通して就業に向けさせるという計画である。フリーター200万人、ニート65万人といわれる中で、ごく少数の若者しか対象にすることができない実践計画であるが、若者自立塾は他の対策とはちがって、人間のあり方に迫って変化を求める画期的な、同時に冒険的な事業である。今までになかった国の若者対策事業であることを特記したい。その理由は、若年労働力の確保と維持を目標にしながらも、合宿共同生活を通して若者の意識や態度の変容を意図した、人間存在の基本に迫る教育的アプローチを採用したことである。

2、若者と塾風教育の関係

「若者自立塾」の塾風教育の発想は、すでに不登校やいじめや引きこもり対策の活動として用いられているが、その源流は若衆宿や塾風教育にある。すでに足立浩（1990）も指摘しているように、若者の自立は自主性、共同性を育む生活体験の中から湧いてくるものである。「君は川流を汲め、われは薪を拾わん」と言った、広瀬淡窓の咸宜園の漢学塾があったように、昔は全国各地に共同生活と人格形成にすぐれた効果をあげた塾教育があった。また、大正期の国家主義的学校教育を批判して、塾風教育を強調した運動には、勤労を避けて教育はあり得ない、一斉詰め込み知識は身につかない、教師と生徒の人格的接触のない教育は危険であるなどと、総合的価値教育の必要性を説いた実践的な社会教育運動があった。こうした塾風教育の流れが「青年の家」の源流にあると足立は述べている。

若者自立塾の発想のひとつには、こうした人格的な影響を及ぼす相互学習体験にある。合宿塾の学習法はグループダイナミックスの教育方法である。すでに Ardoino, J. (1969) が指摘したように、塾風の教育は「触媒作用」である。一般に学習方法には大別して3つある。すなわち1) 栄養供給者と栄養摂取者の関係のように、与える側と受け取る側になって伝達的手段となるもの。2) 条件反射のように繰り返しの訓練によって、方法知を体得していくもの。3) 化学の触媒作用のように、人と人との交流によって生じる相互刺激が触媒になって学ぶという、ソクラテスの助産術の方法である。

若者の塾教育は、化学の触媒作用のように、指導者が知識を与えたり指示命令を下す訓練よりも、仲間同士がお互いに存在していることを自覚することによって、相互に学び合うという意欲を触発するのである。その力動的相互交流が存在の学習になる。ある場合には、自分自身がすでにもっていたものを自覚していなかっただけで、交流体験を通して再発見につながることもあり、また、仲間や指導者に手を借りながら教えてもらったり学んでいくこともある。塾教育はヨコの人間関係によって学習していくのである。

若者自立塾の合宿生活は、寝食を共にしながら、学ぶ、話す、遊ぶ、働く、助け合うという生活体験が「バレル研磨」のように相互に切磋琢磨した触媒作用によって、各自の生活学習になる。それは単に知識を注入されるというものではなく、ともになぐさめ癒し合ったり、「他人はわが鏡」という譬があるように、見倣いながら学び合ったり、お互いが助け合い、励ましあいながら協同作業を遂行するという協同体験が身につくのである。

若者の心理的特性は感受性が鋭く、時代の先端を感覚的にとらえており、自立のために大人の支援を待っている弱い存在である。いわば子供おとなであり、大人こどもであるという不安定さと矛盾がある。そこに導入される全人格的な交流の塾生活の場は、若者にとって自立に向かう成長の変化をもたらす絶好の機会になり、その教育的意義が大きい。

3、ニートの問題

ニート (NEET, Not in Education, Employment or Training) の問題は、イギリスのブレア政権が1998年に導入した「Welfare to Work」のスローガンの下に若年者ニューディール政策をとったことから拍車がかかった。Millar, J. (2000)によれば、それ以前のサッチャー政権では、市場主義最優先の経済政策であったがため、若年失業政策は後回しであった。多種類の若年者職業訓練の実施はしてきたが、実績は十分に上げていなかった。全てが経済効果重点主義であったから若年対策は軽視されたのである。

1997年に提案した政府のマニフェストでは、25万人の若年失業者を無くすると公表して、2001年には見事に28万人の就業支援を行ったことが社会に評価された。

ブレア政権では、山口二郎 (2005)によると、新たにPA (Personal Advisor 個人支援者制度)を導入して、福祉的援助を通して就業に結び付ける政策を積極的に行った。中でも、若者が無業化する以前に手をさしのべることで、職業の事だけではなく、生活全般にわたって支援していくように大人のネットワークづくりを総合的に行った。その政策の一環として、義務教育を終了しても就業しない13歳から17歳までの若者に対して用いられた言葉がニートであり、類似した社会状況にあった我が国に導入されたのである。

我が国では、90年代の初頭から経済社会の状況が変化した。バブル後の不景気、雇用慣行の変化 (正規雇用の減少と派遣、パート、短期雇用の増大と解雇など)、産業構造の変化 (付加価値生産の高技術者の必要性) などによって、未熟で教育の必要な若者は切り捨てられ、即戦力を求める機能的な人材を必要とする労働市場に変化したことによって、若者の職場が少なくなった。加えて、若者が育ってきた家庭の問題、不登校の経験者、個人の性格に問題性をもっている若者の続発した状況 (立ちすくみや引きこもり) などがニートをつくり出したと言われている。

ニートについての論議では、玄田有史 (2004) らは働く希望を失った若者たちの実像をとらえて社会問題として提起した。また、小杉礼子ら (2005) は面接調査で得たフリーターやニートの若者たちを、学校から職業生活への移行が困難な要因として5つのキーワードを示した。刹那で生きる、つながりを失う、立ちすくむ、自信を失う、機会を待つという状況に分類をして、有効な支援対策の提案をした。さらに本田由紀子 (2006) らは、ニートやフリーターの定義が曖昧であることを指摘し、ニートの構図を再構築した。

坂口順治 (1989) はかつて勤労青少年の福祉活動において、働く若者の「存在感」の復権を促したが現在も変化していない。ニートの問題も本質的に同じ問題性を抱えている。若者の問題を人間的な側面よりも、労働力という名のエネルギー代替物であり、主に利用価値優先の活用視点から扱っている。つまり使い捨てにされる若者で人間扱いをされていないのである。筆者が勤務する心理臨床相談所でも、若者の引きこもりや精神的なつまづきという存在感を喪失した若者が増えており、疎外からの回復支援が急務である。

これまでの経緯と研究を踏まえると、現在のニートを生み出した要因には2つの側面があると仮説がたてられる。第1は、若者自身が存在感の覚醒の機会が少ない社会的心理的環境の時代であること。マズローの心理学を借用すると、若者が豊かさの中で育ってきた社会環境は、欠乏充足の基本的欲求や安全の欲求については、すでに備わっていた環境にあった。生命維持のサバイバルな要求を獲得する努力をしないで欲求を満足していた。このような受動的な環境で若者が成長してきた。次の欲求段階である所属や仲間に認められ

たいという認知承認欲求、自らの内発的な能動的な動機づけで獲得する自己実現の欲求も、自己努力なしに付与されるものとの認識に立って受動的なままである。外に向かって能動的に働きかけて獲得する欲求行動ができないでいる。それがため、八方塞がりの行き詰まった状況に陥って、自らの心理的殻の中に閉じこもってしまう。能動的態度も自己客観化も出来なくなり、自己制御という心のコントロールもきかなくなり、孤立化へと押しやり存在感の喪失を加速しているのである。

第2は、親や社会環境つまり大人側の問題である。親は我が子を可愛がり育てるが、その内実は自分の管理下にあつて所有的モノ扱いである。成人してもその所有的関係は不変である。そして、今度は家を出て働かない我が子に対して、以前の見方を変更して邪魔者扱いにする。極端な表現をすれば、愛玩用のモノがゴミ捨て同然になる。つまり、一つの人格としての相互承認がなく、人間として対等なコミュニケーションの関係が成り立たないままに疎外されてしまうのである。

さらに、一般社会の労働観は「働かざるもの食うべからず」という言葉に象徴されるような生産性労働観が優位で、労働の対価としての賃金報酬の考え方がつよく残っている。しかし現代はモノづくり社会一辺倒からサービス労働社会になっている。働くことは他人とのコミュニケーションを円滑にしていく対人関係であり、また、働いて得た収入でもって生活するという二分的発想は減少しつつある。労働の過程と成果が生活になっており、生きることと働くことは不可分である。一般社会では依然として対価主義の労働観を持ち、世代的ズレのギャップを感じないまま若者を扱っているようである。

若者は他者から存在を認められる機会があるとき、自分自身を感じとり、そこから自立し創造的なエネルギーが創出し、労働力を発揮するものである。

4、「若者自立塾」の概要

厚生労働省の「若者自立塾創出推進事業」は2005年度から開始され、全国に20カ所の若者自立塾が誕生した。3カ月の合宿形式によって就業につながる生活訓練、労働体験、資格取得のプログラムを展開している。参加条件は義務教育終了後1年以上経過し現在は無業であり、求職活動、学校通学、職業訓練を受けていない35歳までの未婚の若者を対象にしている。

各塾とも定員20名で、一斉入塾制と随時入塾制のところがある。プログラムはそれぞれの塾によって特色のあるものをつくり出している。

一週間のスケジュールは

右の例図が示しているように原則的に5日制である。生活訓練では、朝の挨拶励行、身の回りの整理整頓、時間の励行清掃当番などが共通している。労働体験では、農業、パン製造、

平日の流れ

07時 00分	朝食
07時 15分	全体ミーティング … それぞれの個人の動きを把握。
07時 30分	自室や施設内の清掃・片付け
08時 15分	それぞれの就労研修先に出発
09時 30分 ~ 17時 30分	各受入れ企業で就労研修もしくは、塾内にて座学、イベント、その他
12時 00分	研修先、もしくは塾内にて昼食
19時 00分	夕食
19時 30分 ~	自由時間、個別カウンセリング
23時 00分	消灯

週末の流れ

〔土曜日〕

09時 00分	朝食
09時 15分	全体ミーティング。 次週の流れ。
10時 30分 ~ 13時 00分	大掃除。
13時 00分 ~	自由時間。サークル活動、スポーツ、イベントなど

〔日曜日〕

完全自由 ただし、夜11時までには帰塾。

*土日は帰宅OK

介護実習、町の清掃作業などがある。資格取得のプログラムでは危険物取り扱い者免許、パソコンやヘルパーの免許などがある。その他各塾の発案で効果的なユニークなプログラムを展開している。それはまた若者塾の特徴になっている。

2006年3月現在では、約500名が卒塾、就業率は約60%である。塾生の男女比は8:2で男子が圧倒的に多く、学歴は中卒約5%、高中退12%、高卒38%、専校中退9%、専校卒16%、大中退8%、大卒12%である。過去の就労経験は、正規社員経験30%、派遣社員7%、長期パート37%、短期パート31%、就労なし8%である。

ニートになった直接的な要因（重複）は、大半が中学や高校でいじめの体験をしている点が特筆される。対人関係コミュニケーションが苦痛になったが74%、挫折経験が契機（職場の人間関係、仕事、倒産、仲間など）になったが72%、引きこもりのままが67%、不登校や学校不適応（欠席）が65%、生活習慣の乱れからが63%、親子間のトラブルが63%、心理的障害とみられるものが29%である。これを見ると、学校時代のいじめの体験が大きな影響を与えており、対人コミュニケーションの能力不足が引き金になっていると受けとめられる。

塾の運営は各施設の色を出して行っている。社会福祉系、学校経営系、学習塾系、NPOの若者施設系、青少年育成団体系、財団系などに分けられる。運営指導方法も特色があつて、いわゆる学校教育の方法を用いたり、青年の社会参加運動のような仲間同志の結合体であつたり、居場所づくりの青年の集まりを拡大した交わりであつたり、学習塾のように個別の指導をしたり、それぞれのユニークさを活用した運営と指導を行っている。

5、事例にみる塾生の生活変化

合宿共同生活の体験学習がどのように塾生に影響を与え、態度と価値観に変化をもたらしたかをとらえるのが本論の中核である。しかし、研修過程と教育的効果を測定する現代の統計調査法では実践を十分にとらえきれない。むしろ社会福祉学で用いるストーリー記録のように事実を記録する中から変化の核心を見いだしていく方法を用いたい。

筆者は12の塾を見学視察した。その後同じ塾を再訪して指導者の相談にも対応しながら塾生にも面接し、ストーリー記録を作成した。3カ月の塾生活から立ち直り就業に結びついた塾生が、態度変化のきっかけになったものは何か、に焦点を絞り整理した。その中から外部発表の了解を得た3人の事例を簡略に記述する。

「事例1（男子A、27歳）」

高校では教師とも友人とも人間関係がうまくいかず中退した。親子などの家庭関係の問題はなかった。アルバイトをしていたが、職場では他人に嫌がられている自分を感じとり挫折体験を味わい、家に閉じこもった。そして酒を飲むようになり、生活がさらに荒れてきた。酒量の増加とアルバイト収入の不足、さらに対人関係の悪化からアルコール依存がひどくなり中毒症状になった。人の勧めもあつて塾の門を叩いた。数日間は何をする気力もなく過ごした。塾生と話し合う時間があつてもなかなか自分から言い出せなかった様子であつた。ある時、塾生の一人が自分の過去を語りはじめた。それに刺激されて、Aは自分の気持ちを吐露した。それを仲間の塾生が静かに傾聴して受け容れてくれた。指導スタッフはその場面に立ち会い全体の雰囲気を支えて彼をうけとめた。その後は塾生と協力活動ができるようになった。こうした経験が下地になったと思われるが、7日間のワークキャ

ンプに出かけた。キャンプは農業体験で苗の植えつけをする仕事であった。仲間と力を合わせて共働することによって目標を達成する努力をした。その汗を流して共に働いた体験が大きな転換点になった。人と協力することのよさ、分かち合う気持ちのよさ、自分だけの世界だけではなく、他人とつながっている気持ちの良さを体感したのであった。

帰塾後は、自分のことを客観化して表現できるようになり認識の仕方が変わった。スタッフとは自らの青年期の悩みとダブらせ、共に語ることもあって気持ちを分かち合えた。

こうした自己客観化の過程から自分の事ばかりでなく、他の人のことにも配慮するようになり、卒塾後は知的障害者の福祉施設の職員として就職、送迎自動車の運転手として勤務している。もちろんアルコールからは離れ、他人と共働する意味を見いだした。

「事例2（男子B、32歳）」

中学時代にクラスでいじめにあい不登校になった経験がある。大学ではクラブの人間関係がうまくいかなかったこと、専門の勉強をしていたが何の役に立つのかと疑問に思い、早く社会に出て働くことの方が大事だと中退して就職をする。しかし、職場では顧客との対応に失敗、コミュニケーションの力がないと退職。その後4回派遣会社やパートの職につくがコミュニケーションのトラブルで辞め、家庭に閉じこもってしまった。父母の干渉がうるさくなり、暴れたり親子関係が悪化した。夜と昼との逆転の生活をし、世間の人の目を気にしながら自分の部屋に閉じこもった。塾のあることはマスコミの報道で知ったが、人の紹介で塾の指導者とゆっくり話し合うことができたことによって、共同生活に飛び込んだ。仲間と生活をしているうちに、自分だけが悩んでいるのではなく、みんなも悩みをもっていることに気づいた。その後、親から離れることと、自分一人で生活できるように働くことを考えはじめた。個人面談では生育歴を語り親との確執を述べた。諸悪の根源が親にあるとばかり語っていたが、その気持ちを切り変えるきっかけになった。

その後、ハローワークへ自主的に求職活動を行い、指導者のアドバイスも受けながら、ホテルや食堂のような人間関係中心のサービス産業を避け、植物などを育てる会社を選んだ。また、寮に入って親から独立することにした。

「事例3（男子25歳）」

大学在学中に自動車の自損事故を起こし、その事が引き金となって何もする気がなくなり、家に閉じこもってしまった。母親が一人で働いている家庭で、外界との接触を断ち切っていた。自力で生活できないから消費することを極力避けて家に閉じこもっていた。何をやる気も生じないまま、心理的なアパシーが続いた。母親は市の相談所に出向き塾のあることを知り、塾の指導員の説得で入塾した。

入塾しても虚脱状態が続いた。しかし、朝食の準備や当番の義務があるので無理に自分の身体を動かしていた。集団生活に徐々に慣れてきたこと、共同作業を共にこなすこと、全員でお喋りをする機会のあること、指導者とゆっくり話合う機会を多くなったことなどが、前向きの生活態度へと変化していった。

約1か月が経過して後、他人から自分の能力を頼られることがあり、自分自身も他の人に役立つ人間であるかも知れないという気分になってきた。もともと理科系の大学で学んでいたこともあって、コンピューター技術も他の人よりも早く習得しており、教えていくことも多くなり、自分の有用性を発見したようだった。

しかし、3カ月経過して卒塾の時期が来ても就職する気にはなれないまま、塾に残り就

職先を探すことにした。そのうちに若者自立塾のパソコン講師になり、後輩の生活指導を兼ねた教師になった。

以上が3事例の概要である。全てに良い結果をもたらしたということでもないが、全体の約60%の若者は就業した。そして、共通している変化や転機となったきっかけは、他の人からの自分に投げかけられた関わりに、自分が気づく感覚をもったことであった。

6、塾生活のプログラムと指導スタッフ

自立塾の研修で変化をもたらす重要な媒介者は指導スタッフである。筆者は訪問した塾の指導スタッフ合計15人に面接をした。スタッフの立場から3カ月の研修期間、募集方法、個別対応の課題、プログラム、塾生の変化などについて語ってもらった。

塾生の変化については、異口同音に塾生が他からのフィードバックによって自分感をもつようになったことが大きな契機になったという報告であった。

プログラムについては、指導スタッフの感受性と判断によって創意工夫がなされ、それぞれ状況に応じて臨機応変に展開していた。以下に3つの事例を記述する。

「事例1（犬の飼育）」

アニマル・セラピー（動物心理療法）があるように、犬の飼育を塾の生活に導入した。盲導犬の候補として選ばれて訓練を受けたが、不合格になった犬を借り入れることができたので共同で飼育した。優しく優秀な準盲導犬である。塾生は食事や散歩をともに過ごすことから、この犬は自分を必要としているという感触が生じて、自分の存在感を感じるようになった。自分の存在感をつかめていない塾生には、自分を頼りにしている他の存在があることを知って自分を自覚してきたという。

「事例2（男子のフェース・メイク）」

偶然であるが、美容学校の生徒からボランティア活動で何かをしたいと塾に申し入れがあった。モデルになる男子の塾生を募集して、エステのモデルになってもらった。最初はためらいもあり少人数であったが、結果が評判になり全員が参加するようになった。その変化は、手鏡に写った自分の顔がメイクを受けたことによって見違える様な顔になった。自分を鏡の中で発見して、初めて感じた自分感である。眉毛を整えることで自分が変わったこと、エステ前と後の変化に自分を感じたというわけである。

「事例3（ホメオストレッチ〔筋肉応用覚醒伸展法〕）」

指導スタッフにストレス・ケアの専門家があり、自由な時間に希望者を募ってリラクセスするための体操を指導した。呼吸を整えたり、ストレスを除去するための緊張緩和のマッサージ体操、カウンセリングのような対話の時間をもって身体と精神の緊張感をほぐす運動をした。その結果は自分が和らいでいくことを感じとったこと、緊張していた自分が何だったのかというような反応が返ってきた。参加した多くの塾生はこのような緊張感をほぐす体操が、あらためて自分を感じるようになったという反応であった。以前はスタッフがしっかりしろと励まして自力の発揮を促していたが、こうした動作と話し合いの機会をもつと、自らが自分を見つめる感覚を養って、自発的な力が生じてきたことに大きな発見があった。その後、プログラムの中にこの体操を導入し定着させた。

以上がプログラムの事例である。共通しているのは、感覚的なフィードバックが自分感を醸成している内容である。

3カ月という短期間に変化を生じさせるための支援の困難さはあるが、その過程に関わる指導スタッフの教育的努力は並大抵のものではない。指導スタッフのあり方が「触媒」となって若者に大きな影響を及ぼしているからである。指導スタッフは、元高校教師、元予備校講師、元職業コンサルタント、元社会福祉施設職員、元医療ソーシャル・ワーカー（MSW）、元心理治療ワーカー（PSW）、元養護施設職員、元会社役員、元人材派遣社員などと多彩な経歴である。指導スタッフは各自の過去の体験が基盤となって指導しており、また自己体験と比較して塾生の変化の過程を表現してくれるので、変化過程の説明を共通化することはむずかしい。さらに塾生とともに共同生活をしているので、冷静に塾生の変化を観察することが至難の技である。しかし、変化は生じている。無意識のうちに徐々に変化していくこともあれば、突然の出来事で覚醒して変わることもある。変化は成長にかかわる複合的な要素とダイナミックな関係性によって生じるから、そのインシデントになるものを突きとめる努力が必要である。種々の条件、環境の変化、人間関係などが統合的に作用して変化が生じている事実を知ることが必要である。

ある塾生は生活訓練にも慣れ、危険物取り扱い者の免許取得の勉強をして試験に合格した。その免許書が送られてきて、自分の名前が書かれていた。そこで「自分は社会に認められたのだ」とスタッフに自信をもって述べたという。それからの彼は表情は明るく積極的に社会参加するようになった。このことは心理的な自己開示に結びつくプログラムではないけれども、自分の存在感を知らしめた出来事になった。資格取得の研修の結果がこうした出来事をもたらすこともあるのがダイナミックな証拠である。

7、変化をもたらす共同活動プログラム

変化をもたらすプログラムや行事や出来事の共通項をまとめてみると次のようになる。

第1は、グループで共同作業をしたことであつた。お互いに今までにしたことのない作業をすることはお互いに助け合うことによって成り立つ。不安な気持ちをもちながらも、相互に慰め助け合って共通の目標を達成しようと共同作業の経験をしたことであつた。

第2は、グループで話し合ったことであつた。お互いに心がオープンになって、過去の苦しい経験を語りあって癒し合う。苦しみは自分一人ではないこと、仲間ができたことなどが、逆に自分に勇気づけられる契機になり、他人を励ます話し合いになった。

第3は、自然との対話であつた。散歩したり、畑を耕しながら自然の匂いや景色に触れながら自分を見つめ直す機会になった。自然の中に自分の身を置く体験であつた。

第4は、スタッフとの話し合いであつた。カウンセリングの時間でもあるが、個人的な問題を親身になって語り合える機会を得たことである。過去の自分のありようを見つめ直し、親との関係を是正していく動機づけになった。

第5は、プログラムの内容が対話的であつた。先述のドッグシッターのように、相手と自分を対峙して自分を振りかえる機会になった対話的内容が役立っていた。

さらに、挨拶の習慣から身の回りの整理整頓という日常生活の基礎訓練、ビジネスマナーや対人関係の能力向上をめざす社会的スキルの訓練、就業に役立つ資格取得の訓練などが有効に機能し、若者をして新しい発見につながった。指導スタッフはこうしたプログラムの立案計画、運営、個人的接触などを重ねながら、全体の流れを就業へと結び付けるダイナミックなプロセスを指導しているのである。そこに若者を育てていく情熱を見る。

8、立ち直り学習の鍵

寝食をともにする合宿生活の人間関係は、存在感を感得して人間力を創出する。自律的な人間力を引きだす若者塾の学習には、次の諸点を考慮することによってさらに成長の期待が得られる。いわは今回の実践報告の要約でもある。

第1は、ニートの若者たちが、固定的な環境から抜け出せるように支援する努力が必要である。引きこもり、立ちすくみという動けなくなった若者は外界との接触を断ち切り、家の中に閉じこもるのが圧倒的である。それは安全だからというのではなく、むしろその行動以外には致し方ないという状況である。部屋に閉じこもることは、心理的には安全を確保しているというよりも、自分の身を置く唯一の居場所になっているだけである。同時に、家族からは心理的に排除の対象となっていることも察知しているのである。

この単調な環境から抜け出す力を与えることが鍵である。スタッフが度々家庭訪問をして、嫌がる気持ちを振り切り強引に引きだすことに成功した事例もある。連れ出された本人はその後、強引に引っ張ってくれたので自分が吹っ切れたと陳述したこともあった。

第2は、信頼関係の形成である。若者が自分の存在感を感じられないような不安定な心理状態にあるとき、塾の雰囲気、指導者、仲間が頼れる相手であるかどうかを感覚的に探っている。それに対応する努力が必要である。絶対的な信頼を寄せてくれる関係づくり、若者が自分の居場所を見いだせる安全な場所であるという安心感のもてる雰囲気づくりが必要である。それは指導スタッフとの人間関係で左右する。さらに塾の立地条件も心理的な安定を得るために大切である。自然につつまれた環境、山や海を眺められる風景、日常生活環境から隔離されている場所なども信頼形成に結びつく間接的要素である。

第3は、プログラムの展開である。自分を見直す機会があり、自分の居場所の発見につながり自分を必要としている人がいる、自分を助けてくれる仲間がいる、サポートしてくれる指導者がいる、癒しあう仲間がいるなどの状況を醸しだす雰囲気をもったプログラムの展開である。

第4は、指導スタッフのあり方である。指導スタッフは塾の全生活を通して触媒作用のはたらきをしている。触媒作用とは、人と人と触れあうことによって相互に刺激を与え合って変化する化学反応のような人間学習である。いわば「出会い」の体験学習である。そこには真剣な人間と人間との対決があるといっても過言ではなかろう。肝胆相照らすというような指導スタッフがいることによって、若者は自分の心に響き合い、見直す気持ちを醸成するのである。それは人間学習の根幹であり、媒介者としての指導スタッフのスタンスに関わってくる。そこには卓越した指導能力や指導技能を求めているのではなく、むしろ人間性の機微に触れる感受性と関係を取り結ぶ人間性の質を問われてくるのである。

また、指導スタッフの役割には、ミラーやコリー犬と呼ばれるはたらきがある。ミラーは自分の姿を照らし返す鏡写のように、自分の姿を指導スタッフに投影して、相手の姿や動作から自分の姿を感覚的に知るのである。メンターのように、1対1になって指導スタッフがフィードバックしてくれることによって自分が照射されるのである。

コリー犬は、羊の群れを見守る番犬の役割である。イモを洗う場合、桶や樽の中で擦り合わせて洗浄するように、合宿生活の中で相互に切磋琢磨して学べるように、安全を確保し相互成長が遂げられる風土を作り、外から見守っていく役割である。塾生の自主的学習行動を支援していく間接的管理の役割と責任とである。

9、おわりに

いままで述べたてきた経験は、筆者が若者自立塾の創出当初から関わり、現在も若者の生き方学習を追跡しているひとつの記録である。若者を弱者として扱い、熱交換エネルギーの代替物としての若年労働力、使い捨てのモノ扱いをしてきた利用価値の社会、こうした今までの観念を変革することを、若者自立塾の運動が示唆しているように思う。

若者の存在感が自覚的な覚醒に至るためには、他者からのフィードバックが届く必要がある。Identification（自己存在証明）は、他者からの指摘と自覚とが同時性をもって認識されるとき、ダイナミックな力になるという。そうした実体験をした学習である。かつてある哲学者は「万燈我を照らして我を知る」と言ったが、他者が自分の居ることを認めたというメッセージを受けとめることによって、自分の存在を感じ、自分がこの世に有用であるかも知れないと思うようになる。若者はこうした感覚的体験を塾生活の中で経験しているのである。感覚的にも存在を自他ともに認めると、能動的な生きる姿勢に変わり、さらに生き甲斐の発見につながる「自己覚醒」の経験になっていく。

ニートを生み出した社会的要因は多々あるが、根本的には社会が若者の存在感を軽視しているからである。いわば価値認知の欠如である。その改善対策にはコミュニティの中で、お互いの居場所を確認し合えるコミュニケーション活動が必要である。幼児教育、義務教育のあり方、学校教育にキャリア教育の充実化などが政策として実施されているが、さらに若者たちに対して生きることと働くことを浸透させていく活動が求められるのである。

現代は情報社会の渦中にあつて肌でコミュニケーションのできる機会が少なく、お互いが交わる相互関係相互触媒作用の機会が希薄である。生涯教育の視点から見れば、コミュニティの人間関係は世代を超えて人と人とのコミュニケーションを図り、相互の立場を尊重し共働することができる。その過程が存在感を確認し合う学習になり、触媒作用としての生涯教育のリーダーシップ発揮が活用されるのである。

次の時代を背負う若者たちが存在感を相互覚知するコミュニティづくりには、人と人が出会うパッションをもった大人のリーダーシップ発揮と、塾風教育の良さを継承していく努力が鍵をにぎっている。

引用文献

- ・ 足立 浩 1990 『青年共同宿泊研修の源流』 pp. 5-6. 日本教育研究センター
- ・ Ardiono, J. (岸田他訳) 1970 『現代教育論 下』 pp. 14-18. 東京大学出版会
- ・ 玄田 有史ほか 2004 『ニート』 pp. 19-33. 幻冬社
- ・ 本田 由紀子ほか 2006 『「ニート」って言うな』 pp. 42-92. 光文社新書
- ・ 小杉 礼子ほか 2005 『フリーターとニート』 pp. 200-212. 勁草書房
- ・ Millar, J. 2000 『Keeping track of welfare reform - The New Deal programmes』 pp. 40-47. York Pub. Service for Joseph Rowntree Foundation
- ・ 坂口 順治 1989 「時代の変化と勤労青少年福祉」『社会福祉学』 30-1. pp. 143 - 156. 日本社会福祉学会
- ・ 山口 二郎 2005 『ブレイク時代のイギリス』 pp. 31-37. 岩波新書